まえがき

「名詞類の文法に関しては，未開拓の領域が大きく残されているように思われる」（福田・建石編：iii）という問題意識のもと，2016 年 11 月に『名詞類の文法』が刊行されました。それによって，名詞研究の意義や重要性を一定程度提示できたように思います。ただ，その後，5 年近くが過ぎましたが，未開拓の領域が残されているという状況はそれほど大きく変わっていないようにも感じます。

本書の導入やあとがきでも述べられていますが，名詞研究は動詞研究に比べると，研究自体の数が少なく，テーマの拡がりや多様性という点においても，まだまだ発展する余地があります。名詞研究の切り口や可能性を提示して，新たな研究分野を開拓し，大学院生や若手研究者に積極的に参入してもらいたい，名詞研究の活性化を図りたい，そのような狙いから本書が企画されました。

本書は概説書と専門書をつなぐもの，いわば名詞研究の道標となるようなものを目指しました。各章の前半が基礎編としての研究動向，後半が応用編としての各自の研究論文という構成になっているのは，そのような理由があります。それによって，名詞研究のこれまで（研究動向）とこれから（研究論文）を示すことができればと考えています。

本書は『名詞類の文法』の刊行に携わった 6 名により企画，執筆されました。『名詞類の文法』のあとがきにも書きましたが，博士論文を執筆した若手（当時）の研究者たちを集めた「TLM 研究発表会」という研究会が 2005 年に作られました。本書の刊行に携わった 6 名はいずれもその研究会のメンバーです。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

現在に至るまで，15 年以上，年に 3 回前後の研究会を行うという活動を継続してきました。それぞれのメンバーがどのようなことに関心を持ち，どのような研究を行っているのか，またどのようなスタイルで研究を進めているのかなど，多くのことを共有しながら，それぞれのライフスタイルが変化しても緩やかに続けることができました。本書はその研究会活動の一つの集大成という位置づけです。このような形で無事に刊行できたことは，私たちにとって望外の喜びです。

最後になりましたが，本書の企画を後押しし，刊行へと導いてくださったくろしお出版の荻原典子さんに心より感謝申し上げます。

建石始

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目次

まえがき……i

導入―名詞研究の入り口に立ってみたいあなたへ―……岩男考哲　1

第1章
コーパスを利用した限定表現のコロケーション研究……建石始　7

【研究動向】コーパスを利用した名詞研究の動向と課題……8
【研究論文】連体詞「ある」・「一つの」と共起する表現……25

第2章
助数詞と名詞のつながり……眞野美穂　49

【研究動向】助数詞をめぐる研究の動向と課題……50
【研究論文】名詞と助数詞の間……67

第3章
名詞と引用形式の接点に生じる諸現象……岩男考哲　87

【研究動向】引用形式が名詞を提示する現象……88
【研究論文】名詞に対する「評価的」意味はどのように生じるのか……106
―「評価的」意味研究の更なる発展に向けて―

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 4 章
名詞化辞の用法の対照……松瀬育子　127

【研究動向】「名詞化辞」の研究動向と課題……128
【研究論文】カトマンズ・ネワール語の文末 =*gu*……156
—文末名詞化辞と発話行為—

第 5 章
叙述の類型と名詞文……益岡隆志　177

【研究動向】日本語叙述類型論の研究動向と課題……178
【研究論文】述語名詞におけるカテゴリー形成……194

第 6 章
名詞述語文の研究史に関する一考察……坂本智香　211

あとがき……251

執筆者紹介……255

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

導入

名詞研究の入り口に立ってみたいあなたへ

岩男考哲

1.　はじめに

「動詞について何か論文を書いてみてください」と言われて頭に浮かぶテーマは何だろうか。ここでは，「その課題は広過ぎて（曖昧過ぎて）こたえられない」という（ある種，賢明とも言える）返答以外の答えを考えてみよう。アスペクト？テンス？あるいは，活用に連用節？ヴォイスや格，更には命令表現や授受表現，移動表現に引用表現等もその射程に入ってくるであろう。これ以外にもおそらく，様々なテーマが挙げられることと思う。

それに対して「名詞について何か論文を書いてみてください」と言われて浮かぶテーマは何だろうか。名詞分類？指示？定・不定？連体節…？筆者自身の勉強不足に起因するところは大きいだろうが，動詞に比べると，言語研究の世界に定着した馴染みのあるテーマが次々と浮かぶとは言い難いというのは認めていただけるのではないだろうか。

参考までに，「日本語文法学会」の学会誌である『日本語文法』（くろしお出版）の 2010 年～ 2019 年（10 巻 1 号～ 19 巻 1 号[1]）に掲載された【研究論文】【研究ノート】全 117 本のうち，タイトルに「名詞」を含む論文（あるい

1　本稿執筆時の最新号が 19 巻 1 号である。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 1 章

コーパスを利用した
限定表現のコロケーション研究

建石始

【研究動向】

コーパスを利用した名詞研究の動向と課題

1. はじめに

近年，IT の進展とともに，さまざまなコーパスが開発，整備され，日本語研究にコーパスが用いられやすくなってきた。逆に，コーパスを全く利用しない研究は以前と比べると，少なくなりつつあると言える。そこで，本章の研究動向編では，他の章の研究動向編とは異なり，名詞研究の内容ではなく，名詞研究の手段の一つとしてコーパスを取り上げる。また，研究論文では，コーパスを利用した名詞研究のケーススタディとして，連体詞「ある」と「一つの」が共起する表現についての分析を行う。

研究動向編では，コーパスを利用した名詞研究の動向と課題を示す。具体的には，国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」（以下では，単に「日本語研究・日本語教育文献データベース」と示す）や「CiNii」に収録されている書誌情報などを利用しながら，コーパスを利用した名詞研究として，これまでにどのような研究が行われているのかを確認する。次に，先行研究からコーパスの利用方法にどのようなものがあるのかを確認し，今後どのような研究が行われる可能性があるのかを示したい。さらに，ケーススタディとして，コーパスを利用した名詞研究を取り上げ，どのようなコーパスを利用して，どのような分析が行われているのかを紹介する。以上の内容をもとに，最後にコーパスを利用した名詞研究の現状と課題，ならびに展望（コーパスを利用した名詞研究のこれまでとこれから）をまとめる。

本稿の構成は以下のとおりである。まず，2. では先行研究をもとに，コーパスを利用した名詞研究の全体像を示す。3. ではコーパスの利用方法を確認する。4. でコーパスを利用した名詞研究の一端を示し，5. でコーパスを利用した名詞研究の現状と課題，ならびに展望をまとめる。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

【研究論文】

連体詞「ある」・「一つの」と共起する表現

1. はじめに

本章の前半の研究動向編では，コーパスを利用した名詞研究の動向と課題を探った。それを受けて，コーパスを利用した名詞研究のケーススタディとして，不定を表す連体詞「ある」と「一つの」とのコロケーションについて考察を行う。

建石(2017)によると，不定を表す限定詞には，連体詞「ある」[1]，「一つの」や「一人の」といった「一＋助数詞＋の」，後方照応に使用される「この」や「こんな」などがある。建石（2017）は「ある」，「一＋助数詞＋の」，後方照応に使用される「こんな」について，限定詞の階層性という概念を提示している。

建石（2017）は建石（2005）がもとになっている。詳細は次節以降で述べるが，本稿は 15 年以上前に分析した内容の一部をコーパスを利用して検証するものである。本稿の構成であるが，まず 2. で建石（2017）の内容を確認し，本稿の問題の所在を確認する。3. で「ある」と名詞の間に出現する表現，4. で「ある」の前に出現する表現を調査する。次に，5. で「一つの」と名詞の間に出現する表現，6. で「一つの」の前に出現する表現を調査する。7. が本稿のまとめとなる。

2. 建石（2017）の概要と問題の所在

2.1 建石（2017）

建石（2017）は，不定を表す限定詞に「ある」，「一つの」や「一人の」といった「一＋助数詞＋の」，後方照応に使用される「この」や「こんな」な

1 以下では，便宜上，単に「ある」と表記する。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 2 章

助数詞と名詞のつながり

眞野美穂

【研究動向】

助数詞をめぐる研究の動向と課題

1. はじめに

日本語では，（1–2）からも分かるように，数量を表す際，基本的に助数詞（counter）の助けが必要となり，英語のように直接名詞を数詞（numeral）で修飾することは一般的ではない。この数詞と組み合わされた助数詞（「3 匹」や「3 杯」）は，日本語において「数量詞（quantifier）」として働く。

（1） a. 3 匹の犬／* 3 犬
　　 b. three dogs
（2） a. 3 杯のビール／* 3 ビール
　　 b. three glasses of beer ／ #three beers

ただし，「-つ」でしか数えられないもの（例：2 つの意見）では，共起できる数の制限（1–9 に限定される）ゆえに，10 以上の数の場合，数詞のみでの直接の修飾が許容される場合があることには注意が必要である（例：10 の意見／* 10 つの意見）。この点については本稿では扱わないため，飯田（1999）や眞野（2004）などを参照されたい。

助数詞の研究で，議論されてきた話題の 1 つに品詞の問題がある。「-個」のような典型的な助数詞を考えると，数詞と助数詞を切り離した場合，助数詞の部分はそれだけで独立して使用できないことから，接尾辞であるという捉え方がなされてきた（益岡・田窪 1992，飯田 1999）。しかし，助数詞の中には名詞から派生したと考えられるものも多い（例えば，「-杯」は「杯（はい）を重ねる」のように名詞としても使用される）。「-台」のように，名詞として使用された場合と助数詞として使われた場合の意味が明確に異なるものについては接尾辞として異なる語彙とする見方もとれるが，そうではない場合，例えば「グループ」（例：3 グループ）のような場合，どのようにその品詞を捉えたらよいかについては課題が残る。この点からも，助数詞の研究

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

【研究論文】

名詞と助数詞の間

1. はじめに

日本語には「-枚」,「-回」などの多数の助数詞が存在し[1]，その研究は盛んに行われてきている（研究動向編参照）。しかし，そのような典型的な助数詞に加え，日本語名詞の中には「3 グループ」のように，数詞を伴い，助数詞のような役割を果たしているかのように見えるものも多数存在する。

これまでの研究の中で，助数詞研究の対象となってきたものは，（1）のように，接辞であり（つまり，数詞などを付加しなければ生じることができない），使用頻度が高く，典型的な助数詞とみなされるものであった。そして，それら典型的な助数詞の意味的・統語的特性を解明するための研究が活発に行われてきた。

（1） a.　3-{人／匹／枚／切れ}
　　 b. *人（にん）／匹／枚／切れ

しかし，（2a）のような数詞に後続し，助数詞的な振る舞いをする名詞と助数詞の境界については，未だ統一的な見解は得られていない。（2b）から分かるように，これらは（1b）と異なり，それだけで名詞として生じることができる，つまり接辞ではなく，語としての性質を持つ。これらの助数詞的な名詞については近年，研究が本格化したところである（2. で詳しく見る）。

（2） a.　3-{グループ／大学／文字／兄弟}
　　 b.　グループ／大学／文字／兄弟

1　本稿では「助数詞」という用語を使用するが，これは，研究動向編で説明したように，より詳しくそれらを分類した影山他（2011）の「類別詞・計量詞」などを含む表現を指すものとする。本稿ではその内部での機能的な違いを分けず，両方を指す場合は「助数詞」と呼ぶことにする。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3章

名詞と引用形式の接点に生じる諸現象

岩男考哲

【研究動向】

引用形式が名詞を提示する現象

1. はじめに

本章では，文や発話において名詞を提示する際に引用形式も共に生起する現象を取り上げる。まず前半部の研究動向編においてこうした現象を扱った先行研究の概観を行い，続く後半部の研究論文編ではそれらの表現の中から，今後更なる研究の発展が期待されるものを取り上げて考察を行う。

この研究動向編で紹介する現象は大きく 2 つにまとめられる。1 つめは「連体修飾表現（名詞修飾表現）」，そして 2 つめは「提題表現」である。

これらの表現の中で引用形式が用いられることはよく知られている。ただし，名詞に対する引用形式の出現位置が対照的である。以下の例（1）–（4）からも分かるように，連体修飾表現の場合，引用形式は名詞の前に，そして提題表現の場合は名詞の後ろに出現するのである。このように，現代日本語における引用形式は，名詞に対して様々な位置に出現し得る。

では，その一部の例を見ていこう（本稿では，「被修飾名詞」や「底の名詞」と呼ばれることのある名詞（（1）で言うと「話」の部分）を「主名詞」と呼ぶことにする）。

【連体修飾表現（名詞修飾表現）】

（1）　来年からコーヒーが値上がりするという話だ。
　　［連体節＋という＋主名詞］

（2）　駅前に新しくコーヒー屋ができるとの噂を耳にした。
　　［連体節＋との＋主名詞］

【提題表現】

（3）　コーヒーって，ついつい飲みすぎちゃうよね。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

【研究論文】

名詞に対する「評価的」意味はどのように生じるのか
―「評価的」意味研究の更なる発展に向けて―

1. はじめに

前半部の研究動向編では，主に連体修飾表現と提題表現の研究動向を概観してきた。これを受けてこの研究論文編では，提題表現，中でも研究動向編の 3.3 で観察した「評価」に関わる現象に焦点を当てて議論を行う。主に「ときたら」という形式と「評価」との関係について議論を行っていく。

従来「評価」という概念を巡っては，形容詞の研究において議論が行われることが主であったと言える。ところが近年，形容詞研究以外の文脈において，「評価」やそれに類する概念の指摘が見られるのである。

先行研究については次節以降でより詳しく見ることになるため，ここでは簡単に具体例を挙げるに留めるが，例えば次のように，助詞「と」に動詞「来る」のタラ形式が後接してできた複合辞「ときたら」が名詞を提示する表現（以下，「N トキタラ」と表記する）が表す意味を説明する際に「評価」やそれに類する語が用いられることが多い（森田・松木 1989，藤田 2000，日本語記述文法研究会編 2009，岩男 2009, 2014, 2019，益岡 2012）。以下に具体例を挙げる。

(1)　地球上には知性をもつ動物なんていない，人間が脳を使ってやること<u>ときたら</u>，ひどい間違いを次々に犯すことなんだから…。
（BCCWJ[1]：ダイアン・アッカーマン（著）／葉月陽子（訳）「月に歌うクジラ」）

上記の現象の興味深いのは，「すばらしい」「ひどい」等，形容詞に代表されるような，いわゆる「評価」を表す内容語（content word）が用いられてい

1 「BCCWJ」とあるのは『現代日本語書き言葉均衡コーパス』からの例である。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 4 章

名詞化辞の用法の対照

松瀬育子

【研究動向】

「名詞化辞」の研究動向と課題

1. はじめに

「名詞化（nominalization）」は，従来，名詞以外の品詞である動詞や形容詞を名詞として用いる際の語形変化を指すのに用いられてきた。例えば，日本語の名詞「美しさ」が形容詞「美しい」から，あるいは，英語の名詞 construction が動詞 construct から派生される際に，接尾辞「さ」や“-ion”が付加される現象を指す。また，接尾辞なしで品詞性を名詞に変えるものもあり，日本語の「踊り」「問い」では動詞の連用形を名詞として使い，英語の動詞（hit，talk 等）も語形変化なしで名詞として使われる（影山 1989, 1999, 2011，伊藤・杉岡 2002 等）。

しかし本研究動向編では，語形変化に関わる名詞化ではなく，日本語の「文法的名詞化辞」と位置づけられるノの用法と，ノに酷似した用法を持つ他言語の名詞化辞の多機能性について，先行研究を概観する。日本語のノを名詞化辞と見なすことについて，益岡（1997: 18）は次のように述べている。

> 「みやこのちかづくをよろこびつつ，のぼる」を現代語の表現に変えると「都が近づくのを喜びつつ，のぼる」とノが顕在化する。このような点から考えると，現代語のノは従属節を名詞化する働きを持っている名詞化辞と見て差し支えあるまい。

また，金水（1995）では，（1）の様々なノのうち，述語の後ろに現れるノが統一的に説明可能なのか，あるいは，多義・多機能で複数の品詞にまたがるのかという問題の解明に向けて歴史的資料をたどっている。

（1）a.　田中ノ本〈属格〉
　　b.　都市ノ破壊，宇宙からノ帰還〈名詞の項〉

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

【研究論文】

カトマンズ・ネワール語の文末 =*gu*
—文末名詞化辞と発話行為—

1. はじめに

本章の研究動向編では，日本語とチベット・ビルマ諸語の名詞化辞の様々な用法を概観したが，この研究論文編では，カトマンズ・ネワール語[1]の名詞化辞の文末用法に焦点を当てる[2]。

カトマンズ・ネワール語には 3 種の名詞化辞（=*mha*/=*pĩ:*/=*gu*）があり，有生性と数によって使い分けられる[3]。このうち，無生物を表す =*gu* は有生物を表す =*mha*/=*pĩ:* よりも多機能性を示す。どのように多機能かについては，=*mha*/=*pĩ:* と共有する名詞修飾の用法に加え，=*gu* はできごとを表す埋め込み節の区切りを示し，日本語のノダに相当する用法も持ち，文末にも位置して様々な文意を表す点にある（松瀬 2016, 2020）。

この研究論文では，（1）（2）に示される文末 =*gu* 文がどのような意味（解釈）を表すのかに焦点を当て，叙述の末尾に名詞化辞を付すことでどのような機能を担うのかについて考察する。

1　カトマンズ・ネワール語はネパールの首都があるカトマンズ盆地一帯で話される言語で，シナ・チベット語族，チベット・ビルマ語派に属す。2011 年の国勢調査での話者数は 84 万 7 千人。語順は SOV であり，能格表示システムを持つ。

2　本章の研究動向編では，日本語のノとチベット・ビルマ諸語の名詞化辞の多機能性を概観した。次の段階として，文末 =*gu* と日本語の文末ノの用法との対照研究が志向されるが，文末ノは，文末 =*gu* に比して，その用法が限定的と言える。日本語記述文法研究会編（2003: 272–273）において，文末ノは丁寧体（女性語）の述語に接続し，ノダと似た機能を持つと記述されている。また「んですノ」は「文にやわらかく，上品なニュアンスを付け加える」とある。この後 3. で見る文末 =*gu* の様々な用法との違いを考慮して，ここでは対照研究ではなく，文末 =*gu* の用法の解明に注力する。

3　Hale and Shrestha（2006: 82）では，=*mha* が有生単数，=*pĩ:* が有生複数，=*gu* が無生物（単複の別なし）を表す名詞化辞（modifier）であると記されている。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 5 章

叙述の類型と名詞文

益岡隆志

【研究動向】

日本語叙述類型論の研究動向と課題

1. はじめに

日本語の文論（sentence grammar）は日本語の文の形（構造）と意味の対応関係の解明を目標とする。この文論へのアプローチの1つに「叙述類型論」（the theory of predication types）と呼ばれる見方がある。叙述類型論とは，文が事態を叙述するものであるという前提のもと，文における事態の叙述に2つの大きく異なる様式が認められ，その様式の違いが文の形（構造）に映し出されるとする見方である。

従来の言語研究では一般に，出来事（本章では，「事象」と呼ぶ）を叙述する動詞述語文（例えば，「子供がおもちゃを壊した」）をモデルとして文研究が進められてきた。そこでは，述語を動詞で代表させるのが一般的であり，例えば語順の言語類型においても，“SVO”や“SOV”のように，述語は“V”（verb）で表される。それに対して叙述類型論の見方においては，文の叙述には事象の叙述に加えもう1つの重要な叙述の型が認められるとする。

そのもう1つの叙述の型とは，所与の対象がいかなる属性（property）を有するのかを叙述するもの（例えば，「音楽は心の糧だ」）である。叙述類型論では，これら2つの叙述様式の違いを「事象叙述」（event predication）・「属性叙述」（property predication）という名称で区別する。従来の言語研究では事象叙述が文研究のモデルとされてきたことから，事象叙述・属性叙述を叙述様式の両輪と見る叙述類型論においては，属性叙述が事象叙述とどのような異なりを見せるのかという課題，及び，事象叙述と属性叙述のあいだにどのような関係性が見出されるのかという課題に力を注ぐことになる。

本章の研究動向編では，このような課題に取り組む叙述類型論が日本語研究のなかでどのように展開して現在に至ったのかという研究の流れを整理して示したいと思う。併せて，これまでの研究成果をもとに今後どのような課題に取り組む必要があるのかについても考えてみたい（cf. 岩男（2008,

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

【研究論文】

述語名詞におけるカテゴリー形成

1. はじめに

上述の研究動向編において，名詞文と属性叙述の関係を明確にしていくことを研究課題の 1 つに掲げた。それを受けて，本論文では，名詞文における述語名詞がどのようなカテゴリーを表すのかという問題を取り上げる。

本論文の出発点は益岡（2016）である。属性叙述研究の一端をなす益岡（2016）は，「属性」の概念の明確化に取り組もうとするとき，属性叙述文を代表すると見られる（1）のような名詞文に目を向ける必要があると考えたのであった。

（1）　あの人は作家だ。

名詞文「X ハ Y ダ」における属性叙述のあり方は，それに対応する古代語の名詞文「X ハ Y ナリ」の構文様式に顕現する。「X ハ Y ナリ」は「X ハ Y ニアリ」に由来するが，この「X ハ Y ニアリ」は対象 X が Y というカテゴリーに存在すること（“X IS LOCATED IN Y”）—言い換えれば，Y というカテゴリーに所属すること（“X BELONGS TO Y”）—を表している。例えば（1）の場合，対象である「あの人」が「作家」というカテゴリーに所属していることが表されている。益岡（2016）では，このような属性を「カテゴリー所属の属性」，略して「カテゴリー属性」と称した。

名詞文はこのように，対象にカテゴリー属性を付与するという働きに応じた構文様式を取るのであるが，このカテゴリー属性付与の要となるのが述語位置に現れる名詞である。名詞文の述語位置に現れる名詞を，ここでは「述語名詞」（predicate nominal）と呼ぶことにする。述語名詞は属性叙述の対象が属するカテゴリーを表すわけであるが，具体的にどのようなカテゴリーを表すかに応じて多様な表現形式を取る。そこで本論文では，述語名詞がどのような表現形式によりどのような内容のカテゴリーを表すのか—言い換えれ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第6章

名詞述語文の研究史に関する一考察

坂本智香

1.　はじめに

名詞述語文とは，名詞が「ダ」「デス」等の語（以下「ダ」とする）を伴って名詞述語を形成している文のことである[1]。

（1）a.　私ハ幹事デス
　　b.　幹事ハ私デス
　　c.　私ガ幹事デス　　（三上 1953: 44–46）[2]

（1）は，三上（1953）が指摘した「措定」（=（1a））及び「指定」（=（1b）（1c））の用法の例である[3]。こうした用法の分類は，名詞述語文研究において最も活発に議論されてきたことの１つである。

しかしながら，名詞述語文に関する研究を行ってきた研究者たちが個々に抱いてきた問題意識や興味・関心の中身は，（1）に示した用法に関することも含めて，実に多様である。そのため，本章では，これまでに行われた研究の成果の中から，名詞述語文の文法的特徴を理解し，残された課題を検討する上で重要と思われるものを中心に概観することにする。

本章の構成は，以下の通りである。まず，2. では，名詞述語文に関する研究の出発点として，日本語の名詞述語文の表現内容と表現形式の関係を言語普遍的な言語機能及び表現機能の観点から捉え直した論考を概観する。次に，3. では，名詞述語の定義に関わる研究として，「ダ」の文法的機能（3.1）と，述語になることのできる名詞の範囲（3.2）に関するさまざまな見方を概観する。続いて，4. では，名詞述語と形容詞述語・動詞述語の違いに関する

1　ここで「名詞述語文」とは，「名詞を述語とする文」のうち，（1）のように，文法的な観点から主語（助詞「ハ」または「ガ」により標示される）と述語が整備された文（述語文）のことである。本章ではまた，名詞と「ダ」が結びつくことにより形成された述語を「名詞述語」と呼び，名詞述語から「ダ」を取り除き，残された名詞句内の主名詞を「述語名詞」と呼ぶ。

2　（1c）は原文では「私ガ幹事デス」のように下線が施されている。

3　（1c）は三上（1953: 45）で「指定以前のセンテンス」とされているが，本章では「指定」の用法として扱う。このことについては 5.1.1 を参照されたい。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers